関西自然保護機構会報 18(2)：141－152，1996



対　談

# 『琵琶湖の自然と文化』

吉　良　竜　夫

VS。

川　那　部　浩　哉



## LAKE BIWA: ITS NATURAL AND CULTURAL SETTING

Tatuo KIRA　*Lake Biwa Research Institute.*
Hiroya KAWANABE　*Lake Biwa Museum.*

琵琶湖のほとりで，日本の生態学を動かしてこられた二人の先達が，この度前後して，「コスモス国際賞」と「日本学士院エジンバラ公賞」を受賞された。琵琶湖研究所前所長・吉良竜夫氏と，琵琶湖博物館館長（前京都大学生態学研究センター長）・川那部浩哉氏である。受賞を機にお二人に琵琶湖をめぐるお話を伺ってみた。

### 二つの賞・二つの生態学

――ご本人たちの口からこれを言わせるというのは，まともな常識のある者ではとてもできないことなのですが。吉良先生から，「コスモス国際賞」の受賞理由についてお聞かせいただけますか。

**吉良**　何でいただいたかということを言うのですね。それは，選考委員長が書かれた選考理由というのがありまして，本人がそれを読むと「本当だろうか」と思ってしまって困るのですが……。僕は，それまでのエコロジーとは少し違うエコロジーをやってきたという意味のことがあったかな。あとは「いつも広いグローバルな視野をもち」とか。それは言い換えれば，あっちこっちに手を出していたということで，学者としてはいいことではないのですが。それともう一つは，僕はその言葉が嫌いなんですが，「自然との共生」。これは花博の基本理念にもなっていまして，それを一生かけてやってきたという。そういう業績でいただいたということになっています。

――ありがとうございました。それでは，川那部先生の「日本学士院エジンバラ公賞」の方はいかがでしょう。

**川那部**　私は，まだこれから貰うので，本当の受

賞理由は知らんのです。あれは自然保護に関係のある人に対するもので，そういう形で10年前にできたんですね。２回目の向井さんは自然保護には直接関係なかったけれど。

**吉良**　向井さんってどういう方でしたっけ。

**川那部**　九州の遺伝をやった人です。あとは沼田さん，高橋さん，前回の岩槻さん。みんな自然保護そのものもやってきた人たちです。そういう人に与えられてきていたので，私がいただけるというのは，ちょっと不思議でした。私は自然保護の一番もとになるっていうかな，生態学の中でも「生物と生物の間に何が起こっているか」，それも「関係の連鎖の総体」とでもいうのが好きだったんです。そういうものを通して自然の在り方というようなものをちょっとだけいたずらしただけですから。こういう賞をいただく理由は，６月10日になったら，書いたものがもらえるので，そうしたら公式のものがわかるんですが。

――お二人の偉大な生態学者に共通する点を考えてみたんですが，どうもお二人ともお寺に関係しているのではないかと……。

**吉良**　僕はそうです。寺の子です。

**川那部**　私もです。

**吉良**　川那部さんもそうだったのですか。

**川那部**　吉良さんの方はまともな寺で，私のはなまぐさ坊主です。

**吉良**　いや，うちもそうですよ。うちは禅宗寺ですけれども，檀家というものはない。末寺という，寺の一番下のランクです。信徒というのが何軒かあって，それだけなのです。だからお寺だけではやっていけないので，おやじは本職は小学校の教員でそれで食ってきたのです。お寺はほんの副業です。ただ住職というので一応の修行とか資格とかが必要で，昔はここ堅田で修行していたこともある。要するに先生であって，全然坊主じゃなかったんです。

――何か生態学と仏教とは，すごく関係ある気がするんですが。

**吉良**　仏教というと。

――生態学の本質は仏教の万物流転・因果応報とよく似ているという感じがするのですが。

**吉良**　それはそうです。仏教の考えは常に生態学的ですよね。例えば道教と比べますと，道教もある種の自然宗教ですが，仏教の方がよりエコロジカルでしょうな。

――お一人が植物の生態学，もうおひと方が動物生態学で，お二人ともお寺さんだったというのは何かあるのかなと思った。僕も生態学やるなら坊さんの子に生まれればよかったと。

**吉良**　関係ないな。少なくとも寺という環境とはまったく関係なかった。

――次は相違点ですが，「吉良生態学」と「川那部生態学」とどう違うかというと，乱暴に言っちゃうと，吉良生態学は一般法則を，川那部生態学は多様性を終始追い求めてきたのではないかと思うんです。一見それらは対局にあるが，自然を理解するにはどちらも非常に重要なんでしょうね。

## 琵琶湖研究所創世記

――さて，長年琵琶湖に深く関わってこられて，これでおやめになるというわけではないんですが，激務からちょっとだけ身を引かれるということで，少しゆっくりされるとお聞きしていますが，そういう状況になってみて，何かこれまでされてきたことの思い出とか，言い残した方がいいなと思われるようなことがありましたらお聞かせ下さい。

**吉良**　僕が初めて琵琶湖研究所を創ったときには，こういうことをしたいとか，ああいう研究所にしたいとか，いろいろ考えていましたけれども，いろいろ違う考えをもち，違うバックグラウンドを

もった人たちが集まって創るわけですから，なかなか思うようにはならなかった。そのかわりに，僕が全然考えもしなかったことをやる人が出てきて，それが琵琶湖研の看板にもなりましたしね。なかなかこういうものは自分の思うようにはならない。それぞれの人たちがそれぞれの部門の専門家として，いい仕事をするけれども，同時に横の情報交換が十分あって，共通の情報の上でそれぞれの仕事をするという場にしたいと思ったのですが，必ずしもうまくはいかなかったですね。環境科学というものがあるとすれば，やっぱりそういうものであるべきだと思うんですけれども，それは非常に難しいことですね。なかなかよその分野のことを理解できないからね。

**川那部**　最初は言葉まで違いますからね。

**吉良**　そうです。言葉が違うのはまだいいですけど，同じ言葉が違う意味で使われますから。

**川那部**　ちがいますよね。

――吉良先生には大阪市大を途中で逃げられちゃったんですけど，森の研究から湖の研究に移られて戸惑いはありませんでしたか。

**吉良**　ありませんでした。もともと水だけやる研究所にしようとは思いませんでしたから。陸上も含めて全部やる。今でも陸上の研究をしているのが半数近くいますからね。僕自身は本格的に湖の勉強なんかしたことがなかった。けれども，水のサイクルというのはずっと気にし続けてきましたから，あんまり違和感はなかったです。

――一番驚いたのは行かれて１年か２年で世界の湖沼の研究をオーガナイズしちゃいましたよね。

**吉良**　あれは他動的で，あんなことをするなんて思いもしなかった。琵琶湖研究所という組織が４月にできましてね，今の建物が建ったのが12月なんですよ。それまでの間，博物館と同じで借り住まい。県庁の向いの滋賀会館の二階の大部屋に，みんな詰め込まれていたんです。そこにお使いが来て，知事がちょっと来てほしいという。５月くらいでしたかね。それで知事室に行くのかと思ったら知事公舎の方に連れていかれた。公舎の中にも会議室のような広い部屋があって，部長たちがずっと並んで部長会議をしてた。武村知事がね，「世界湖沼会議をやろうと思うんだけれども手伝ってくれ」と。「それは結構なことですから，僕のできることならお手伝いします」と言って……。武村さんは「あーよかった」と言っているんですよ。僕はそれで帰りました。その日だったと思いますが，湖沼会議をやるという記者発表があったんです。どういうことをするんですかと記者が聞いたら，「琵琶湖研の所長に任せてあるから」と……。

それから準備委員会ができて，森主一先生なども入ってきて，私はなんか知らんけど座長にさせられていた。そういうことなんですわ。僕はおやじが大津生まれで，子供の頃よくこの辺に連れて来られていたので，琵琶湖にはなじみがある。琵琶湖なら楽しく老後の研究をやらしてもらえるだろうと思って大阪からきたんです。そんな国際会議をやらされるなんて思ってもみなかったんです。準備委員会ではいろんな案が出て，研究者だけでなく行政・住民も参加してもらうというアイディアが出た。僕の発想じゃなかったんですが，面白いからやりましょうと賛成したんです。

僕がやったことで一番成功したのは，橋本道夫さんを委員長にもってきたことです。いろいろ考えて。あの方はもともと「大気の人」で水の専門家じゃなかったけれども，あの人しか適任者はいないだろうと思ってすぐ電話したんです。あの人は，僕の北野中学の後輩でね。「先輩に頼まれたらしかたないわ」って引き受けてくれたんです。僕は実行委員長をしましたけれども，全体の組織委員会，会議そのもののリーダーシップも橋本さんにとってもらったんです。これが成功のもとで



したね。

――世界の湖についての会議をなさって，琵琶湖について何かハッとされたことはございますか。

**吉良**　どれくらいの人が来てくれるかと思ったら，予想以上にたくさんの参加者がありました。こっちもいろんな人を呼びましたけれども。少なくとも武村さんは，世界中からエキスパートに来てもらって，いろいろ話を聞かせてもらって琵琶湖の参考にしようと思っていたんです。そしたら外国から来た人が「琵琶湖はようやっとる。もっと琵琶湖の情報がほしい」と。それで県庁の人たちが，真面目にやってればそれだけの評価が得られるということで，自分たちのやっていることに自信をもったと思います。

――琵琶湖研が教わったことは何かあるんですか。

**吉良**　もちろん教わったことはあるわけですけども，琵琶湖から教わって帰った人もたくさんいた。それが印象的だった。あの会議の成果としては，もう一つ住民参加に力を入れたポリシーがよかったんでしょうね，それまでは役所のすることにことごとく反対してきた人たちが出てくれた。ことごとくと言うと語弊がありますけどね。そして，これからは住民だけとか行政だけとか言わずに，両方で協力してやらないと，環境が良くはならないという立場が非常にはっきりしてきた。地元に反対のグループが一つありましたが，他にはほとんど批判的な声は聞こえてこなかった。それは非常に大きかったし，僕は驚き，かつうれしかったですね。例えば宇井純さんが来てくれるのかと。

**川那部**　それは何年でしたっけ？

**吉良**　1984年です。

**川那部**　今ならごくあたりまえかもしれませんが，非常に早いですね。

**吉良**　非常に早いです。それだけのことをやったというのは。武村さんという人は先を見る目があったと思っています。

――もちろんそのころは，川那部先生のセンターはまだできてませんでしたね。

**川那部**　まだまだ。

### 1984年と1992年

**川那部**　私はいくつか琵琶湖での仕事をしたことがあるんですけど，少し離れた格好でしてきたようです。センターへ来てからもセンター長としての役割が多かったから，仕事はむしろ，やっとこの４月からやれるかなというところです。まだ何もわからんと言うのが正しいでしょうね。

それで，今の吉良さんの話について言うと，1984年などというのでは，そういうことは本当に珍しい時期でしたね。役所は一般にかたくなだったし，住民との間で議論をたたかわす可能性などなかった。それが20年の間に少しずつ広がってきたことは確かだという気がします。２年前か何かに建設省が，河川管理のなかに，治水と利水の他，「自然環境に配慮して」ではなくて，「自然環境の保護」が，自己目的の一つだと言い出したでしょ……。私なんかは大学院の頃からそう考えていたし，時には発言もしてきた。だから，まことに

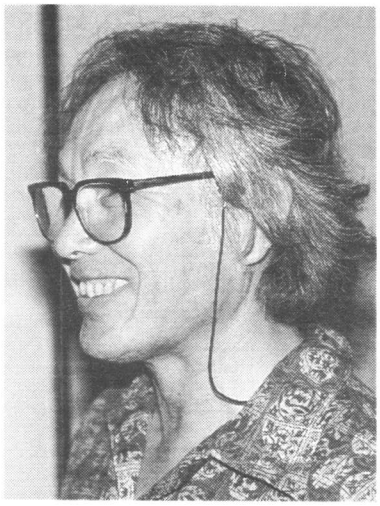
「遅い」と思いますけど，すごい大きな変化にはちがいないですよ。そりゃ，まだなにも本当には動いているとは言えませんが，とにかく考え方ないしお題目だけでも向こう側から出てきたわけで，そういう状況のもとでこんどは，研究者やなんやらも，個々のところでは反対ももちろんしますけども，一般にどうやっていったらいいか，積極的な提案が必要な時期ですね。とにかく議論ができるような状況にやっとなったというところですね。そういうような意味で，この吉良さんの84年は，そのときは思わなかったけれども，非常に大きな時点だったのですね。

**吉良**　まだあの時点ではインパクトにはならなかったでしょう。少なくとも建設省あたりに対しては。当時建設省は湖沼会議自体に反対しましたからね。琵琶湖は国が管理するんだという立場ばかり出してきて……。建設省が歩み寄ってきたのは1992年のリオ会議以降，社会の流れが変わったからでしょう。だから社会全体の流れが建設省を変えたわけで，湖沼会議が変えたのではないのです。

ついでに後日談をさせてもらうと，こないだ霞ケ浦で第６回の世界湖沼会議がありましたが，経費の半分を建設省が負担したそうです。第１回当時の琵琶湖工事事務所長が，今は土木研究所の環境部長で，閉会式の場で一つの部会の総括報告をやった。「私は第１回会議のときは大反対だったけれども……」とケロッとしていました。今は大変な環境熱心家です。

――僕の感じではリオから風が吹いてきたから変わったというのもあるんですが，変わるきっかけをあれに求めていたというのもないですかね。かなり前から困っちゃっていて，どうしようもないとこに行っていて……。そう思いません？

**吉良**　僕はまだそういう実感はありません。もっとも上で河川行政をやっている人たちには，あるいはそういうことがあったかもしれないけれども，



末端でやっている人々は，上がそれだけ変わっても，あんまり変わっていませんよ。

**川那部**　それは今でもね。

**吉良**　ですから，河川行政が本当に行き詰まったから転換の道を求めたということではないんじゃないですか。しかし霞ケ浦の湖沼会議でね，滋賀県に建設省から出向している人だと思いますけれども，一昨年の大渇水が琵琶湖にどういう影響を与えたかという報告をしているのです。それには，建設省のデータも，琵琶湖研を含んだ滋賀県のデータも，それからコンサルタントに委託して取ったデータも，全部入っているのですね。そんなのが全部一緒にまとめられて１人の口から報告されるということは，以前なら考えられませんよ。それが初めて実現したのは画期的なことだったと思いますよ。後は，願わくば，建設省の人が扱っているメカニカルなシステムと自然のシステムとは，相当違うということをもうちょっと認識してもらえば，もっと良くなると思うのです。しかし，これはなかなかわかってもらえない。

――だけどなんとなく認識しようとする努力はしているようですよ。

**吉良**　一つのシステムをつくっているエレメントが，条件が変わるとそのエレメントの性質も変わ

るという，そういうシステムは，普通の工学のシステムにはないのです。まあ，食うものがなくなったら別のものを食べ始めるやつがいるのですよ。そんなシステムは予測不可能なシステムだということを理解してもらうだけでも，ずいぶん違うんだと思うのですが。

**川那部**　一般的に，自分がまったく理解出来ないものが存在するということを認めるということは，大体難しいものですね。

**吉良**　この話をして思ったのですが，こうなるまで十何年間かガタガタやってきたけれど，いくらかは成果があったのかなと。

**川那部**　去年の８月にブラジルであった国際陸水学会では，長良川の環境に関する問題でね，西条八束さんと建設省の女性の技官とが連名で発表しました。いくつかのところで意見は違うのだそうですが，少なくとも事実に関する限り西条さんが発表するものとその人が発表するのとが並んでいてね。西条さんが初めて，とにかく議論ができるようになったと，ニコニコしておられました。

**吉良**　そういう意味では関西は昔からよくやってきたと思いますよ。

### 琵琶湖博物館が目指すもの

**川那部**　ここで私から質問をさせてもらいます。私はこの４月から琵琶湖博物館の館長ということになっているのですが，これは琵琶湖研究所とともに吉良さんがいろいろ考えてきはったものですね。研究所と博物館を別にするというのは，私はなかなか面白いやり方だと思うんですが，両方を別々に置くことを考えられた理由を，吉良さんに話して欲しいのですが。

**吉良**　博物館ができた時に，一緒にしたらええやないかという話しはありました。どうすべきかなと思いましたけれども，琵琶湖研究所は環境の研究所という枠を最初からはめていますので，理学的に面白いことがあっても，テーマによってはある程度以上はできないんですよ。自己規制ですけれども，研究所のプロジェクトとしてそういうのは出せないんです。例えば，何百万年前に琵琶湖がどうだったかというようなことはやっぱりやりにくいです。ですから，もっと自由に研究をする研究機関があってもいいだろう，それには琵琶湖博物館が一番いいだろうと。琵琶湖研究所ははっきりと環境の研究所として創ったのだからその枠のなかで役にたつ仕事をすると，僕はそういう割り切り方をしています。

**川那部**　先に出てきたような変化のまっただ中で，琵琶湖という環境をどうするかということはものすごく重要なことですからね。滋賀県の中だけでも県立大学もありますし，水産試験所や衛生環境センターもある。そのうえ，龍谷大学や立命館大学もある。京大の生態学研究センターもある。こういう中で本当にコーディネートして，環境問題をどうしようかということを琵琶湖研究所が一番にやるべきだということですか。

**吉良**　琵琶湖研究所がやらんといかんということですね。まあそれだけの実力をもっているかどうか自信はありませんけれど。

**川那部**　それはちゃんとできると思いますけれどもね。環境問題に関するコーディネートは少なくとも琵琶湖研究所が……。

**吉良**　やるという覚悟でないといけないと思います。

**川那部**　逆に博物館は，私がお聞きするのはおかしいのだけれども，琵琶湖博物館は単純なもちろん基礎研究所でもあります。「博物館における研究」というようなことについて，そのへんの考えはざっくばらんにお聞かせいただきたいのですが。

**吉良**　博物館というものには博物館固有の任務がありまして，その任務は十分にやってもらわ

んといかんけど，研究そのものでは「博物館だから」という枠ははめなくていいんじゃないかと僕は思います。むしろ枠をはめずに自由にやった研究を，いかに博物館のなかで活かすかということは工夫してほしい。博物館だからこういう研究をというのは，とくに考えなくていいんではないかな。もちろん博物館らしい研究があってもちっとも差し支えないけれども，それでなくちゃならないとは考えなくていいんではないですかな。そういう点で完全にフリーダムをもっているのは博物館なんです。県立大学も環境科学部ですから，やっぱりいろいろうるさいことといわれるでしょう。それほど自由ではないかもしれない。やはりあそこは，環境科学というものをちゃんと作り上げていくことに努力せなあかんし。「琵琶湖周辺のことについて面白ければなんでもやる」という，それだけのフリーハンドをもっているのは，環境科学部でもなく琵琶湖研究所でもなく，博物館だと思うんですね。

**川那部**　創られた方にそういってもらうと，ものすごくこっちはうれしいんですけれど。しかし，逆を言うとそれぞれをどういうふうに活かすかというところが，非常に大事なところですね。

**吉良**　枠があるとすれば，琵琶湖とか湖とかから完全に離れてしまうことは，やはり難しいでしょうね。少なくとも研究費を県からとりにくくなるでしょうね。県や議会から，なんでそんなことをやるんだと聞かれるに決まっている。大学はその点，割と自由ですけれどね。琵琶湖研究所でも，よその湖，よその国の湖をやろうとすると，なんか理屈をつけないと。

**川那部**　そういう意味で言うと，琵琶湖博物館は準備室のときから，よその湖との比較のために出ていましたね。これからは長期に腰を落ちつけて，他の国でも調査をしなければいけない。

**吉良**　「琵琶湖を通じて世界へ」というのを最初から打ち出してありますから。これは川那部さんにいうたかどうか忘れましたけれど，僕が博物館の企画にタッチする前のことですが，県が有識者に琵琶湖博物館を創ることについてのアンケートをしているんですね。おもしろいのは，関西の人たちは「琵琶湖博物館、それは面白い，やれ」って言われるんです。それで，琵琶湖を通じて世界の湖の問題へ広げろと。しかし，関東の人たちは，琵琶湖博物館では成り立たないだろう，水の博物館にしろと言われる。西と東では，琵琶湖というものに対して意識も認識も違うんです。

**川那部**　それは非常に良くわかります。それは遠い近いではないですね。例えば東京の人たちは霞ケ浦の博物館なら成り立つと思うやろか。私はそうは思わないと思うんです。

**吉良**　そうは思わないでしょう。そりゃあ湖に対する認識がないということも関係しているでしょうけれども，関東は一般論から入るという考え方が強いんでしょうね。

**川那部**　館長になって未だ2カ月ですから，自分とは無関係のような顔をして褒めてもいいと思うんですけれども，10月の開館までは目標を「湖と人間」という狭いところにはめ込んだから，かえってバーッと急に国際的になるというラインは，去年の国際陸水学会でもやっぱり理解してくれますね。「しもうた」という意見がありました。「うちも先にやるべきだった」と……。バイカル湖とか，本当の古代の湖では，今は作れる状況ではありませんが，もう少しそうでない所で，「やられた」というのです。そして，琵琶湖博物館に見習っていろんなことをやっていこうかという話しが出てきました。きっとここ10年くらいの間に，よその国でも作られていくでしょう。

**吉良**　客観的に見れば，なんぼがんばっても霞ケ浦では博物館にならないと思います。琵琶湖だからなるんです。琵琶湖は，まあそれだけの中味が

ある湖じゃないですかね。

**川那部**　そうですね。古さなんかの話しでは数百万年ですから，バイカルやタンガニイカよりは一桁新しいんですが，それでもわかっている限り，世界で何番目かにはなる。深さだって今の二つの湖に比べたら，琵琶湖なんていうのは，これまた一桁小さいけれども，まともな湖として考えられるぎりぎりのところといってもいいのではないかな，あらゆることで。そしてもう一つは，文化の話ですね。ヒトはアフリカで生まれたそうですから，ヒトが湖とつきあった歴史は，タンガニイカ湖のほうが古いかも知れません。だけど証拠をもってさかのぼれる点では，琵琶湖も世界中でもっとも古いところまでいきますわね。粟津湖底遺跡は縄文中期だそうだし，貝も魚も人間が採って食べて集めて捨てた証拠ですし，文献的にも特別に漁業許可を与える文書で九世紀のものがある。琵琶湖とその周りは，自然も文化も含めて，いわば何でもあるんです。

こういうことも含めて私なりに言うと，琵琶湖博物館はいろんな意味で「入り口」だということです。本当は琵琶湖と周りが博物館なんですね。しかし，ほとんどの人は，周り全体が博物館とはなかなか思わないでしょう。だから，それに入る「入り口」として今の琵琶湖博物館というものがある。そこでどんなものかというのが，いろいろわかってきたら，今度は周り全部が博物館という考え方がきっとできるだろうということなのです。

それから，これもやはり吉良さんが考えはったことだと思うんだけれども，従来の啓蒙的なのはやめようと。人に教えるという形じゃなくて，自分たちの「くらし」の歴史それ自体が博物館なのだから，それを持ちこんでもらう。こういう意味でも「入り口」にして，博物館を皆で創ってもらう。そしてそれを，世界の湖と人のくらしへと拡げる，そういう「入り口」にする。

そうそう，これは強調しておきたいのですが，琵琶湖博物館が成功した一番の理由は，非常に早い時期に学芸員をとったことですね。だからすべてがオリジラルになっている。

**吉良**　ただ僕は心配していたんです。この人たちは一番仕事のできる，一番いいときに拘束されて自分の研究ができない。学芸員じゃなくて，技師やら何やらとへんな名前をつけられて…。研究職ではありましたが。あんなことをしたらくさってしまうので，せめて組織だけでも早く作ってやってくださいと，知事に言いに行ったこともありました。

**川那部**　展示を見てみるとすぐわかるように，学芸員は良い意味で競争をしていますよね。広い意味で自分の仕事をそのまま出したものが出来ているのです。ちょっとやり過ぎの気味もあるぐらいに。

**吉良**　琵琶湖博物館の前に千葉の博物館ができたのですが，同じような感じがするのです。ただし，あそこなどは，何を展示しなければならないという焦点がないんです。そうしますと，それぞれの人が自分の専門分野を展示に出したいということになりますから，統一性がなくなってしまうのです。琵琶湖博物館の場合には，琵琶湖という申し



分のない種子がありますからね。その種子から皆で育てるでしょう。だから盛りだくさんは盛りだくさんだけれども，「なぜこれを見た後に，これを見ないといけないのか」ということがないのです。「当然見るべきものが並んでいる」のです。その意味で，琵琶湖博物館は非常にやりやすくて幸福な博物館だと思うのです。一般のナチュラルヒストリーの博物館だと，いったい何をテーマにして並べていいか必然性がないのです。

**川那部**　一般の博物館だと，あれがないではないかというのが出てくる。例えば「南米で絶滅した哺乳類の化石がないのはなぜだ」ということになるのです。

**吉良**　琵琶湖博物館にはその心配はない。だから，非常にすっきりした博物館になると思いますけれども。

――川那部先生は，先ずタンガニイカ湖でしょ。その後にバイカル湖へ行き，最後に琵琶湖博物館の館長でしょう。見事に湖でつながっているんだなー。最初からの計画なのかと……。

**川那部**　全然ちがう。どこかで言ったかもしれないけれども，私は変な人間で，一度も自分でこれをしてみたいと強く思って始めたことはないのです。アユの仕事にしても，宮地伝三郎さんに「これをしてみないか」と言われて……そのとき何で行ったかという理由は，非常に単純で，1955年ですからものすごい貧乏で汽車賃くれて，泊まったら泊まり賃くれて，アルバイト料はくれないけれども，行っている間ただでしょう。母１人子１人だったから，京都にいるときのご飯代が浮きますからね，極端なことを言うと。タンガニイカ湖の場合も，先輩の河端政一さんが名前を貸せというのから始まってね，河端さんが科学研究費の申請を何遍出しても落ちる，10年目位で通りまして，ただただついて行きました。二度目に出すときに「国立大学の教師が出した方が通りやすいって言う噂があるから，おまえ代表になれ」といわれて。理由は付けますが，私のは全部後からです。

**吉良**　日経新聞の「私の履歴書」という記事で，梅棹忠夫君が「自分のやりたいことばかりやってきて，一生をすごした」と書いている。「なんという奴だ」と思いましたよ。僕も川那部さんと同じで，大体においてやらせられて来た仕事ばかりです。大学にいるときの研究は，さすがにそうではありませんでしたが。だから「何をいつどういうふうにやる」かはあまり計画的でない。ただそれを引き受けようかどうしようかというときに，自分の選択がはたらく。自分のラインに載るものなら引き受けるけれども，そうでないのは引き受けない。後から他人が見ると，一貫しているように見えるのだけれども。

## 学問とアマチュアリズム

**吉良**　日本は成熟度が高いので，本来の意味でいうアマチュアの人たちが随分いるんです。

**川那部**　だけどそれは，皆にちゃんと認識されていないという気がしてならない。

**吉良**　されてません。その人たち自身がなにか卑下している所があってね。もっと大きな顔をして出ていらっしゃいと…。

**川那部**　そうですね。

――僕なんかもまさにアマチュアから出発したのだから，今の先生の言われていることすごくよくわかります。それでプロになったとたんに，僕の仕事あんまり面白くなくなってしまったって，よく川那部先生にかまわれる。一番困ったのは趣味がなくなってしまったんですね。

**吉良**　そうですか。

――アマの頃は研究が趣味だったんです。それが趣味をやって給料をもらうようになっちゃって。女房に，「あなた，退職してからの趣味を考えて

おきなさい」と言われて。この頃，鳥は趣味じゃなくなっちゃったんで，何を趣味にしていいのかわからないんです。

**吉良**　それはおもしろい。

――― 意外とアマチュアの時の方が生き生きとやっていた。だから今のアマチュアの人にももっとがんばってもらいたい。

**吉良**　僕はね，昆虫や植物は子供の頃から好きなんだけれども，それは個々の花が，個々の蝶々が好きなので，それが楽しみですね。考えてみると，それとは重複しないような研究テーマを選んできた。だから僕は山に行って葉なんかむしったり，測ったりすることをやってきた。それはいろいろしんどい仕事だけれども，そのかわり，道端にいろいろな花が咲いたり蝶々がいたり……それが楽しみで，少々辛くても面白いというバランスがとれていた。

**川那部**　たしかにそう言われればそうかもしれません。吉良さんのお書きになったことに一番最初に反発したことは，「自然地理学」というご本だったかな。その中に，できるだけ具体的な生物名は出さずに，種類A，種類B，種類Cというのでいきたいと書いてあって……。私がそれを読んだときには，生物があんまり好きじゃないのが，やっとアイディアが出て，のめり込めそうな時期でしたから，ものすごく癪にさわってね。しかし，今おっしゃっているのをお聞きすると，ものすごくわかる。わざとそうされたのですね。



**吉良**　いろんなとこへ仕事に行った時にちょろまかしてきた植物たちが，わが家で何十年も生きとるわけですよ，完全なアマチュアです。あんまり大っぴらに言いたくないんだけれども，僕は外国旅行に行くと，たいていね，差し障りのないような植物をポケットに忍び込ませてくるんですよ。例えばブラジルへ行くとね，新世界はほら，アナナスの仲間，パイナップル科のいろんな着生植物がいっぱいある。電線の上に無数にくっついていたりするわけですよ。そういうのは，税関に見せてもどうということはないんです。そういうのが毎年わが家では花をつけます。雲南に行くと，挿し木ができそうな植物の枝を切って，ビニール袋に入れて帰ってくるんです。挿しておくと毎年花を咲かせます。そういうのが一方であって，それと仕事の方とのバランスがとれる。

――― そうですね，大学はアマチュアを組織しにくいですよね。そこで博物館はそういう使命をもっているのでは。

**川那部**　琵琶湖研究所もかなりのそういう人たちを組織していたようですけれども。

**吉良**　必ずしもそうではありません。博物館に移る前から嘉田由起子さんなどはよくやっていましたが。嘉田君の仕事はああいう人間相手の仕事ですから。ホタルの調査のような自然科学的な仕事も，奥さん連を含めて一般の人を組織してやった。そういう伝統はなくさずにおきたいと思っているのですが。

――― ちょっとだけ琵琶湖から日本全体とまでは言いませんが，せめて『KONC』の会員へ何かメッセージを。

**川那部**　ほんまにKONCっていま何を狙っている

の。

――それが解らないから今こういう企画をして，話しをお聞かせいただいているのです。だけどKONCって吉良先生たちが最初にやられた時から随分違ってきているのではないですか。僕の理解では研究者が自然保護運動でなくて，自分たちの研究をどういうふうに保護に結び付けるかということを模索する組織というふうに設立趣旨から理解しているんですが。最近は層が広くなってきて，一般の人とかアマチュアの人とかいろんな人が入ってきて，中には運動したいという人がいないわけでもないと思うんです。

**吉良**　要するに自然保護に関心のある研究者の集まりです。やはりベーシックなことをやっていこうという組織だったことは確かなんです。もともと自然保護協会の関西支部というのがあって，そこに集まってきた人たちが，自然保護協会の活動とは別に，プロの研究者たちで自然保護を考えようとしてできたものなんですよ。けれども組織なんていうものは，年月がたつと変わるものですから……。けれども，いつもバックボーンとしてそういう研究者たちがいて，割合狭い視野で運動をやろうとするのとは，一線を画してほしいとは思いますけれども。

**川那部**　琵琶湖博物館は，アマチュアの人を「育てる」というのではなくて，アマチュアの人と「一緒に」…ということなんですけれども，私が前から思っているのは，きちっと対応してその人のアマチュア性をきちっと発揮してもらうためには，博物館の連中はものすごいプロじゃないといけないということです。アマチュアそのものが館員になるのではなく，逆は館員はものすごいプロでないとやって行けないと思うのです。そういう意味でKONCが広がるということは，いいことだけれども，そのためにはプロが必要でしょう。私がアマチュアの人と関係したのはただ一つで，それは淡水魚の図鑑を保育社からとにかく出してしまった。当時の考え方からいうと，滅茶苦茶なことが書いてある。「そのことは，よくわからない」とか……。そうしたら，「よく調べてやろう」というので，アマチュアが増えてきた。そこで百人ほどの著者で山と渓谷社から本を出したのです。

**吉良**　自然保護とは何かと今でも思いますよ。やっている人たちにはよくわかっているんですけれどもね，それを抽象的に言おうとすれば人によってそれぞれ表現の仕方は変わるでしょう。基本的な心情としては，その辺で自然がなくなっていくのが残念で残念で何とか……と思ってやっていることははっきりしているのです。しかし，それを思想として表現せよというと，人によってずいぶん違ってきます。

――突き詰めていくと自分が生きていく上での最後の場所を護るということになってしまいますからね。

**吉良**　そのレベルでの自然保護というのは現実には非常に難しいのです。でも外へ向かって言わざるを得ない。だからいろいろ理屈をつけて言っているんですけど。

**川那部**　しかし，滋賀県って，京都の横にあるでしょう。琵琶湖そのものの大事さは解るけれども，たとえば，文化。狭い意味での文化といったら，多くの人は，ほんまものは京都の中にあって，近江はその余りのように思うんですね。まだ勉強している最中だけれど，たとえば国宝や重要文化財の数で言うと，滋賀県もものすごく多いのですよ。考えてみると京都ができ上がる前から，ここはまさに本州を横断する道ですものね。

**吉良**　京都ができる前に，奈良の時代に大陸とつなぐルートというのは滋賀であって，そこの土地に帰化していった。平安京の周りに帰化人が定着するよりずっと古い。

**川那部**　そういう意味ではものすごく国際色豊か

である。

**吉良**　そう思います。京都の文化のなかに完全にカバーされているくせにね。

**川那部**　そっちのほうばっかり，なにも知らない京都生まれの京都育ちはそう思っていたのを…。

**吉良**　そのくせにね，京都とは違うものがいっぱいある。僕が最初にそうかと思ったのは，安土の「県立近江風土記の丘資料館」の秋田裕毅さんが書かれた『開かれた風景－近江の風土と文化』という本のなかにね，滋賀県は指定文化財が東京，京都，奈良についで多い，東京に多いのは全部博物館にあるのだから除外して，奈良，京都と比べると非常に違うところがあると書いてあります。奈良と京都の文化財は全部寺社に集中しているが，滋賀県の場合は仏像などの重要な文化財の多くを地域社会がもっている。コミュニティが守って来て，今もそのコミュニティのなかにあるというところが違うことを，そのとき初めて知った。そういう所なんです。暮らして見るととても面白いところです。

――やっと対談らしくなってきましたのに，時間がなくなってしまって申し訳ありますん。本日はお忙しいところを，いろいろ楽しいお話しをお聞かせいただいて本当にありがとうございました。

（この対談は1996年５月28日に，大津市「しづか楼」において行われたものを編集部がまとめました。）